

# FLORA KANAGAWA

Oct. 25. 1996

No. 43

神奈川県植物誌調査会ニュース第43号

〒250 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 内線 420・FAX 0465-23-8846

振替 00230-5-10195



クチナシグサ。(山本絢子氏撮影、本文P.474参照)

長谷川義人: ヤナギ科ヤマナラシ亜科ヤマナラシ属の分類 .....	468
高橋秀男: ケイリュウタチツボスミレが記載された .....	469
高橋秀男: ニューフェイスの浮草・ヒナウキクサ .....	469
勝山輝男: コキツネノボタンお玉ヶ池に健在 .....	470
諏訪哲夫: 神奈川県のスイレン科コウホネ属のこと .....	470
久江信雄: 蛭ヶ岳のウスバサイシン .....	472
梅木俊子: コケミズ(イラクサ科)の発見 .....	473
山本絢子: 二宮のクチナシグサ .....	474
金井和子: クマシデにヒノキバヤドリギ .....	474
菊部治紀: 愛川町にホソバミズヒキモ健在 .....	475
田中一雄: コハチジョウシダの新産地が見つかりました .....	475
事務局: 神奈川県植物誌調査会1996年度総会報告 .....	476
守矢淳一・長谷川義人: 会計監査報告 .....	478
事務局: 新刊書紹介 .....	478
城川四郎: 訃報 .....	478

## ヤナギ科ヤマナラシ亜科

### ヤマナラシ属の分類

(長谷川義人)

ヤナギ科ヤマナラシ亜科(Populoideae)ヤマナラシ属は、『神奈川県植物誌1988』では時間不足のため、たいへん不本意でそんな仕上がりと化した。今回、これを少し訂正する形で整理したいと思う

本属は研究者によっては亜属を立てずに、5節とする説もあるが、次の2亜属7節に分けて考えるのがよいのではないかと思う。神奈川県に産するのは、ヤマナラシと由来不明のドロヤナギで、他は移入品のホブラ類である。ヤマナラシ属の全容と県産の種類の分類上の位置を明確にすることを目的とした。

Subfam. Populoideae ヤマナラシ亜科

Gen. *Populus* L. ヤマナラシ属

Subgen. 1. *Populus* L. ヤマナラシ亜属

#### Sect I. *Populus*

##### 第1節 ウラジロハコヤナギ節

*Syn. Sect. Leuce* Duby (1828)

*Sect. Leuce (Duby) Gombocz (1908)*

本節はSect. *Leuce*が従来名であるが、国際植物命名規約の自動名Autonymの規則によって、Sect. *Populus*となる。この節は、次の第2節を含めて以下のような2つの亜節に分類する場合がある。

Subsect. *Populus*

ウラジロハコヤナギ亜節

*Syn. Subsect. Albidae (1905)*

Subsect. *Trepidae* Dode (1905)

ヤマナラシ亜節

しかしながら、ヤマナラシ亜節は独立の節とすることに賛成である。

1988年に扱った種のうち第1節に所属するものは次の2種である。

*Populus alba* L. (1753)

ウラジロハコヤナギ(ギンドロ)

*P. tomentosa* Carr. (1867)

ハクヨウ

ウラジロハコヤナギは、かつて横浜市西区三春台の関東学院に植栽してあったが、美しい木で、県内ほかでも見ることができると思う。ハクヨウは中国原産の種で、たぶん県内には移入されていない。

#### Sect II. *Trepidae* (Hartig) Gombocz (1908)

##### 第2節 ヤマナラシ節

*Syn. Sect. Populus*

*Subsect. Trepidae* Dode (1905)

*Sect. Trepidae* Nakai (1919)

邦産で、第2節に所属する種は次の2種である。

*Populus sieboldii* Miq. (1867)

ヤマナラシ

*P. jesoensis* Nakai (1919)

エゾヤマナラシ

神奈川県内には、ヤマナラシが丘陵から山地にあるが、近ごろは普通でない。

#### Sect III. *Leucoides* Spach. (1841)

この節は日本にない。

#### Sect IV. *Tacamahaca* Spach. (1841)

##### 第4節 ドロヤナギ節

本節はドロノキ節とするも同じで、この節に所属するのは、次の種である。

*Populus maximoviczii* A. Henry (1913)

ドロヤナギ(ドロノキ)

*P. simonii* Carriere (1867)

テリハドロノキ(シモニードロノキ, 移入品)

*P. koreana* Rehder (1922)

チリメンドロ

チリメンドロについては日本にあるともないとも意見が分かれていて、よくわからない。白山にあるという説(林弥栄氏)がある。若葉はたいへん粘質で皺質の種。東北大学理学部柳園に植栽されている朝鮮産の種を見たが、北沢峠付近の狭

葉をもつ厚い皺質のドロヤナギ(若木)とはまったく異なる。ほぼ円形で質薄く粘液に包まれた香気ある芽葉をもっている。

ドロヤナギは冷温帯要素の種で、神奈川県内の産地は1箇所由来不明である。

## Sect V. Aigeiros Duby (1828)

### 第5節 ポプラ節(セイヨウハコヤナギ節)

この節に所属するものは、すべて移入品である。

*Populus deltoides* Marshall (1785)

ナミキドロ(ヒロハハコヤナギ)

*Syn. P. virginiana* Fougereux (1786)

*P. monilifera* Aiton (1789)

アメリカヤマナラシ(モニリフェラヤマナラシ)

*P. nigra* L. var. *italica* Duroi (1772)

セイヨウハコヤナギ(ポプラ)

*Syn. P. nigra*

var. *pyramidalis* (Roz.) Spach. (1841)

*P. anguiata* Aiton (1789)

カロライナポプラ

*Syn. P. carolinensis* Fougereux (1786)

神奈川県内にはこの内の数種が栽培されている。

Subgen. 2. Turanga (Bunge) Dode (1905)

Sect I. Tranga [Bunge (1851)]

*Syn. Sect. Eufraticae* (Dode)

Kimura (1938)

Sect II. Pruinosa (Dode) Kimura

(1938)

この亜属は日本になく、冬芽に頂芽を作らない種で構成されていて(ちなみに、ヤナギ属 *Salix* は、頂芽を作らないで側芽で成長を続ける)、木村有香先生は *Populus* 属の亜属ないしは別属にするお考えである。別属のときは Gen. *Balsamiflua* Griffith (1854) となる。この2節はヤマナラシ属のうちで、もっとも原始的な節でまとめて亜属に引き上げる考えがもっともよいかもしれない。

ケイリュウタチツボスミレが

記載された

(高橋秀男)

「神奈川県植物誌1988」の950頁でケイリュウタチツボスミ *Viola grypoceras* A.Gray var. *riparia* として報告したものは、最近日本スミレの会の山田直樹・鈴木才将の両氏と大阪市立自然史博物館の岡本素治氏によって、正式に発表された。大阪市立自然史博物館研究報告第50号(1996)に「溪流沿いに生育するタチツボスミレの新変種」の表題で、学名は *Viola grypoceras* A.Gray var. *ripensis* N.Yamada et Okamoto と命名された。分布は神奈川県から山口県までの本州各地で、溪流沿いに生え、夏葉の茎葉の葉身部が広い楔形となることで、タチツボスミレやコタチツボスミレから区別される。

ニューフェイスの浮草・

ヒナウキクサ

(高橋秀男)

愛川町六倉の養魚池で、1995年6月20日に浮草の一種を採集した。非常に小さく、ミジンコウキクサではないかと思ったが、よく見ると根があった。その後、しばらくはそのままにしておいたが、今年になって神戸大学の角野康郎先生の「日本水草図鑑」の検索表で同定したところ、標本は根が1本しかないもので、ヒナウキクサではないかと思われた。しかし、自信がなかったので、角野康郎先生へ、ヒナウキクサではないかと、コメントして同定をお願いしたところ、「ヒナウキクサに相違ありません」とご返事を頂いた。ヒナウキクサは南アメリカ原産、日本では東海地方以西、兵庫県までの間に点々と発見されている程度で、関東ではまだ帰化は知られていないようであった。図鑑によると、日のあたる水面では緑白色だが、ハスなどの陰で生育すると緑色を呈するという。本年5月、再びその池を訪れたところ、影も形もなく消え

ていた。この外来の水草がどこから、どのようなプロセスで侵入し、繁茂にいったのか、それがどうして消えてしまったのか、興味深いものがある。一時的な帰化と考えられるが、神奈川県では新記録である。本種は葉の裏を見ると、根が1本しかなく、ほかに類似種がないので同定は容易である。ともすれば、見落としがちな浮草に目を向けると、意外な発見があるかも知れない、と思った。

## コキツネノボタンお玉ヶ池に健在

(勝山輝男)

コキツネノボタン *Ranunculus chinense* Bunge は日当たりの良い湿地に生える越年草で、ケキツネノボタンやキツネノボタンに比べて、葉が細かく分裂し集合果が長楕円形をしている。神奈川県植物誌1988の調査では見出されず、神奈川県レッドデータ生物報告書でも絶滅種とされていた。県立博物館には1960年代に箱根お玉ヶ池で採集された標本(KPM-11182 HAK-5 箱根お玉ヶ



1996年6月16日、お玉ヶ池にて。

池1965.6.26大場達之)が残されていたが、レッドデータ生物報告書ではこれをオトコゼリと誤って報告してしまった。お玉ヶ池ならば、現存する可能性もあると考え、1996年6月16日に探しに出かけてみたところ、アゼスゲ群落の中にわずかに生育していることを再確認できた。お玉ヶ池は植物誌1988の調査でも何回か歩いたが見逃していたようだ。今春は渇水で水位が低かったので、例年よりも湿地の中を自由に歩くことができたのが幸いしたのであろう。

コキツネノボタンは神奈川県植物目録(1933)や神奈川県植物誌(1958)に茅ヶ崎の地名が出ており、松浦(1958)の箱根植物目録にも記録がある。東京大学や都立大学には牧野富太郎らが平塚で採集した古い標本も多数残されている。また、奥山(1989)はレポート日本の植物38号に「神奈川県植物誌」の分布図に加える瀬谷区の植物としてコキツネノボタンをあげている。過去の記録が多い植物でもあり、多摩丘陵や相模川の低地の原野的な湿地から見出される可能性があると思われる。

なお、オトコゼリ *Ranunculustachiroei* Franch. et Sav. は神奈川県植物目録(1933)に谷ヶ、神奈川県植物誌(1958)に足柄上の記録があるが、標本は残されていないことになる。

## 神奈川県の

スイレン科コウホネ属のこと

(諏訪哲夫)

神奈川県博物調査会：神奈川県植物目録(1933)、宮代周輔：神奈川県植物目録(1958)、神奈川県教育委員会：神奈川県植物誌(1958)、松浦茂寿：箱根植物目録(1958)には、スイレン科コウホネの記録がある。しかし神奈川県植物誌調査会：神奈川県植物誌1988(1988)にはコウホネは全く記載されず、ヒメコウホネが川崎市多摩区メッシュに記録されている。その後発行された県立生命の星・地球博物館：神奈川県レッド

データ生物調査報告書(1995)には次の3点の記録がある。

- ①川崎市登戸 1950.3.15 大場達之
- ②川崎市多摩区黒川 1981.8.14 森茂弥(神戸大の角野康郎氏同定)
- ③海老名市中新田 1988.6.15 高橋秀男(「冬に採集し人工的に開花させた」とラベルにメモあり)

筆者は1995年、厚木高校に残された標本を整理し、郷土史家中山毎吉が海老名市で採集したコウホネ標本(高座郡海老名村 1906.7.10)を見いだした。

中山毎吉は、神奈川県博物誌調査会委員の旧制厚木中学校教諭 鈴木光治郎(旧姓石田)と標本の交換をしており、この標本は、「神奈川県植物目録1933」証拠標本の可能性が高いと判断される。

この標本の沈水葉(水中葉)のサイズは長さ25cm、幅8cmあったのでラベル記載のままコウホネとして「厚木の植物1996/植物に魅せられたひとたち」P. 37に紹介し、市の植



海老名市の水路のヒメコウホネ、1996年8月26日、海老名市史編さん室 井上真吉氏撮影。

物展にも展示した。

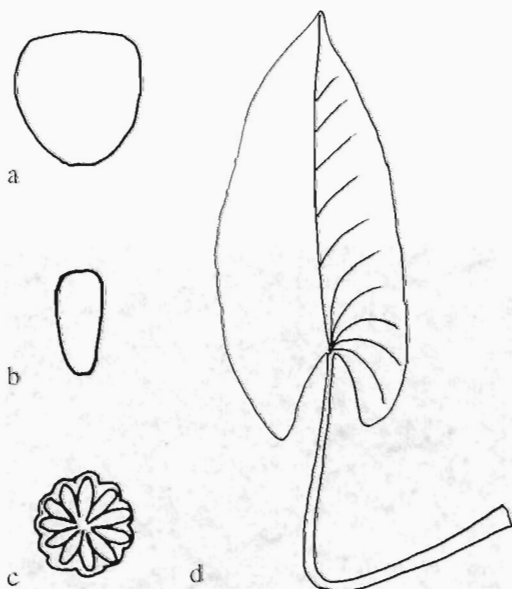
しかし、本年8月末(1996)海老名市史編さん室の井上真吉氏より海老名市中新田にコウホネの自生があるとの連絡を受け、8月26日現地調査を行った。

生育地は2ヶ所あり、1ヶ所は15m<sup>2</sup>ほどの群落をつくり黄色の花が水の流れに身をまかせていた。他の1ヶ所は同じ水路の下流500m位の所に3.3m<sup>2</sup>ほどの群落を作っていた。

浮葉は全くなく、沈水葉のサイズから判断するとコウホネのように思われた。しかし翌日標本の花を観察したところ、花径3~4cmでめしべの柱頭盤に歯牙は認められずヒメコウホネと同定した。中山毎吉標本の形状も全く同様であった。[標本：EB 海老名市中新田 1996.8.26 諏訪哲夫]

8月28日、念のため県立生命の星・地球博物館におもむき勝山輝男、田中徳久両学芸員とともに博物館所蔵のヒメコウホネ3点及び北海道産コウホネ標本数点と比較検討した。結論はヒメコウホネであった。

浮葉があればヒメコウホネ、抽水葉(空中葉)があればコウホネと簡単に同定できるが沈水葉だけのとき、葉のサイズだけでは同定の決め手にはならず、花の観察がぜひとも必要と考えられる。その夜、高橋秀男先



ヒメコウホネ、1996. 8. 26. 海老名市中新田産。a: ガク片(長さ20mm、幅20mm)、b: 花弁(長さ5mm、幅1.5mm)、c: 柱頭盤(直径8mm)、d: 沈水葉(長さ28cm、幅9.5cm、葉柄25cm)。

生に電話で伺ったところでは、同氏の採集された個体は、中新田水路の下流のもので、環境条件により沈水葉の形状には相当変異が起るのではないかということであった。

ここで、中山毎吉標本はコウホネではなく、ヒメコウホネであったことを訂正するとともに、川崎市のヒメコウホネが埋立てにより絶滅した今日、県内唯一の産地として海老名市産ヒメコウホネが永く保全されることを願ってやまない。

参考までにコウホネとヒメコウホネの検索表をあげておく。

1. 葉は水からぬき出て(抽水葉)、長卵形。沈水葉はやや大形。花径4~5cm、がく片は長さ2.5cm、倒卵形円頭。花卉の長さ8mm広卵形。柱頭盤は径6~10mmで歯牙がある。……………コウホネ

1. 葉は水に浮かび、ぬき出ない(浮葉)、広卵形。沈水葉はやや小形。花径3~4cm、がく片は長さ15~22mm、幅15mm、だ円形または倒卵形。花卉の長さ7mm、長方形またはだ円形。柱頭盤は径4~5mmでやや波状の浅歯がある……………ヒメコウホネ

(北村四郎他1961、大井次三郎1965などによる)

終りに当り、海老名市、厚木市教育委員会、県立生命の星・地球博物館の関係各位にお礼を申し上げる。

## 蛭ヶ岳のウスバサイシン

(久江信雄)

1993年5月6日の朝、蛭ヶ岳の急な下りを北の焼山方面に向かって歩いていました。大分下った頃、山道のすぐ脇の今にも踏まれてしまいそうな所に、見たことのない小さなカンアオイが1株咲いていました。全長10cmほどで花は赤紫色、萼筒内部は白い星形に見えました。あとで調べてみようと思い、根を残して地上部のみ採取しました。

帰宅して調べたところ、それはウスバサイシンであることがわかりました。カント

ウカンアオイ、タマノカンアオイ、ランヨウアオイ、カギガタアオイ、スズカカンアオイは知っていましたが、丹沢にウスバサイシンがあるとは知らなかったのも、その時はたいへん驚きました。

その後しばらくして、「神奈川県植物誌1988」という非常に詳細な資料があることを人から聞きました。早速図書館に行き、その本を調べたところ、津久井2にウスバサイシンのフロットがあり、私はこのフロットは蛭ヶ岳であると判断してしまいました。

この時以来、丹沢に登る時には、ウスバサイシンを探すことが無意識に頭に入っていました。同角ノ頭一檜洞丸一犬越路、塔ノ岳一鍋割山、丹沢山、大室山、石棚山稜、大滝沢一畦ヶ丸、堂平、大山などを歩くと、カントウカンアオイ、ランヨウアオイ、フタバアオイはよく見つかりました。

また西丹沢にはズソウカンアオイがあることを知りました。

1995年5月は大倉一丹沢山一蛭ヶ岳(一姫次途中)一檜洞丸一中川へ、11月は八丁坂頭一蛭ヶ岳一丹沢山一大倉へと歩き、以前ウスバサイシンを見つけた周囲を調べたりしましたが、その場所の記憶は次第に薄れてしまいました。

ところが、植物誌調査会のメンバーに加えていただき、今年1月の臨時総会の時に頂



ウスバサイシン、1981年5月31日、丹沢にて、城川四郎氏撮影。

いた津久井2の標本リストを見たところ、ウスバサイシンはなんと城川会長が1981年に丹沢山で採集されているのみで、蛭ヶ岳には無いことが分かりました。これは大変なことになってきたと思いました。

春になり、ウスバサイシンの探索を再開しました。4月に平丸一姫次一蛭ヶ岳と歩きましたが、見つかりませんでした。1996年5月19日の朝は丹沢山を出発し、蛭ヶ岳一姫次一風巻一神ノ川へと歩きました。3年前にウスバサイシンを見つけていたこともあり、蛭ヶ岳の下り道では細心の注意で周囲を探しました。コイワザクラ、ムシカリ、ヒロハツリバナ、ワチガイソウ、シコスミレ、イワセントウソウなど美しい花々を見ると、高地での調査の労苦も吹き飛んでしまいました。地蔵平近くに差しかけた所で、ふと下を見ると、見覚えのあるウスバサイシンがありました。20株ほども見つかりましたが、花を咲かせた株は無かったので葉と根の標本を採取し、博物館に提出しました。

その後の経緯は後日談として、記しておきましたが、こうして、丹沢のウスバサイシンは15年ぶりに再確認されたのでした。

後日談(このやりとりは、県博のみなさんと直接に話す機会が無かったので、電子メールでおこないました。)

提出した標本は花が無く葉と根だけだったため、その後のウスバサイシンの運命を大きく左右するかもしれないトラブルが起きてしまいました。それは、木場先生から、「提出した標本を詳しい先生方に見てもらったところ、フタバアオイでした」、という返事をいただいたからでした。

私は直ちに、「ウスバサイシンがどうしてフタバアオイになるのか根拠を教えてください。また、葉だけの標本でしたが区別できることは明らかなので、フタバアオイとよく見比べてもらいたい」、と返事を出し、1993年に蛭ヶ岳の同場所でウスバサイシン

を確認していたことも伝えました。

すると、「言うとおりのウスバサイシンでした」、との返事が木場先生から届きました。「『神奈川県植物誌1988』の図によるとフタバアオイは葉の上面の脈上に毛が多く、ウスバサイシンは全体に毛があるように描かれています、久江氏の採集品は脈状に毛が多かったので、フタバアオイかと思ってしまったようです。フタバアオイの方が、より普通種であるので予断があったのかもしれませんが。標本庫の標本と照らし合わせたところ、ウスバサイシンの方が脈上に毛が多いことがわかりました」、とのことでした。さらに、1992-1994年に博物館でおこなった絶滅危惧生物の調査の報告書では、「絶滅」と判断されているので、今回の私の記録はとても意味深いものだ、と言われました。

(事務局注 さらに、1996年9月15日に丹沢山のウスバサイシンも再確認されたとのメールが、事務局に届きました。)

## コケミズ(イラクサ科)の発見

(梅木俊子)

1996年6月5日、私の所属している植物同好会の観察会の折、小田原市早川の“海蔵寺”の石段の所でイラクサ科の高さ2~5cmの小型の植物を見つけました。アワゴケとは少し様子が違うと思い、採集して県立博物館に持参したところ、コケミズ*Pilea peploides* (Gaudich.) Hook. et Arn. とわかりました。

標本を調べたところ、1990年7月19日に海老名の森百合子さんが採集された標本がありました。勝山先生に伺いましたところ、庭の植木鉢の中にあつたものを標本にしたので、移入したものとして扱っていたそうです。今回の場所は海蔵寺の石段の間や脇の湿った土の上でしたので自然に分布したものと考えられます。

図鑑には、「葉は対生、円形で全縁。葉の表面には毛があり裏にたくさんの褐色の点がある。茎は水分が多く柔らかで無毛。花



コケミズ、1996年6月12日、海蔵寺にて。

は葉腋にたくさんかたまってく。』とありますが、このたびの物は葉の裏の点が褐色ではないので、今後も観察を続けようと思います。

本州(山形県以南)、四国、九州、琉球、世界の熱帯、亜熱帯に広く分布していますが、これまで神奈川県からは報告がないので、県新産と思われます。

なお、海蔵寺の裏山のアカガシとウメの木にオオバヤドリギが付着していましたことも、併せて報告いたします。

## 二宮のクチナシグサ

(山本絢子)

二宮町百合が丘2丁目のバス通りで、20年前から生えていた植物で、帰化植物ではないかと、何度も調べましたがわからず、そのままになっていたものがありました。1995年5月13日の植物誌調査会総会に咲き残りの花を持参し、城川先生にお見せしたところクチナシグサ *Monochasma japonicum* (Maxim.) Makino とようやくわかりました。

クチナシグサは、神奈川県植物誌(1958)に記録がありますが、神奈川県植物誌1988では発見されていません。別名をカガリビソウというゴマノハグサ科の植物で、丘陵地の日光のさしこむ林に生育します。クチ

ナシの実に似ていることからクチナシグサの名が付けられたそうです。

クチナシグサの名前はどこかで聞いた記憶がありましたが、ごく近くに生えているものとは考えもしませんでした。県植物誌に載っていない種が歩いて2~3分の所に生えていたのには驚きでした。

1996年3月18日に見に行きましたが、株が小さく根元の鱗片状の葉がわずかに伸びているだけでした。4月12日には開花していたので標本を採集しました。7月4日に果実がどうなっているのか見に行きますとほとんど枯れかかっていました。果実は背中部分が割れて種子が見えていました。8月になると、クチナシグサのあった痕跡すらありませんでした。

以前は道ぎわまで生えていましたので、今よりも個体数は多かったように思いますが、現在でも、まだまだたくさんの株が残っています。図鑑では半寄生の越年草とされていますが、何に寄生しているのでしょうか?(表紙写真参照)

## クマシデにヒノキバヤドリギ

(金井和子)

1996年4月24日、秦野市の南が丘公園にて、クマシデの木に見慣れぬヤドリギの仲間を見つけました。さっそく調べたところ、ヒノキバヤドリギ *Korthalsella japonica* (Thunb.) Engler とわかりました。

図鑑を見ると「宿主はツバキ、ヒサカキ、サザンカなどの常緑樹を好む」と書いてありますので、不思議に思い、翌日まわりをよく調べたところ、ありました!宿主を今にも枯らしてしまうと思われるほどヤブツバキにピッシリと寄生していました。

最初に見つけたクマシデの木とは3mと離れていませんでした。ヤブツバキに寄生しているヒノキバヤドリギは深い緑色をしていますが、クマシデのものは日焼けをしたように褐色をおびた緑色で個体数も少なく、じきに





ヒノキバヤドリギ。

消えてしまいそうに思いました。

その後、何度か見に行きましたが、クマシデのものも個体数をふやしており落葉樹でも繁殖力の強さを感じました。

花は非常に小さく6月中旬に見られました。もう少し早くから咲いていたようですが、あまりにも小さく見落としていたようです。

神奈川県植物誌1988によると、県内では鎌倉で採集された古い標本が横須賀市自然博物館に残されていますが、当時の調査では標本が採集されなかったように記されています。その後、1994年に採集された標本が県博におさめられています。これは茅ヶ崎市内で伐られ、捨てられていたツバキの枝に寄生していたもので生育場所は特定できていません。

ヒノキバヤドリギは公園の植栽木や庭木についていることが多いので県南部では今後も見つけられる可能性があります。

## 愛川町にホソバミズヒキモ健在

(荻部治紀)

神奈川県内での記録がほとんどなく、神奈川県レッドデータ生物調査報告書では絶滅種として扱われたホソバミズヒキモ

*Potamogeton ocyandrus* Poiret を愛川町で確認したので記録しておきます。

本種は、一般には水路などに普通に見られるものですが、県内からの記録はわずかで、標本は多摩川からの浮葉のないタイプ(いわゆるナガレミズヒキモ)と思われるものが残されているのみで、あとは文献中に名前が出てくるだけでした。今回発見した場所は愛川町の中津川左岸の下谷地区を流れる元用水路、現在はドブになりかけの水路で、現在のところ一帯に広く見られ各所に群落をつくっています。

愛川町の産地は昆虫の調査中に訪れたもので、2年ほど前から本種の存在には気がついていたのですが、先日たまたま博物館で勝山さんと水草の話をしていたところ、県内の確実な記録がないことを聞き、あわてて採集してきました。

産地ではコカナダモ・エゾモなどと混生しており現在のところ優占種ですが、家庭排水が流入しており、先行きが心配されます。なお、この用水路の流れが早いいためか浮葉はほとんどみられません。標本は1996年8月21日に採集してきました。

(事務局注 荻部氏は県立博物館の昆虫担当の学芸員です。)

---

コハチジョウシダの新産地が見つかりました

(田中一雄)

「神奈川県レッドデータ生物調査報告書」にも記載されておりますが、コハチジョウシダは神奈川県ではたいへん珍しいシダで、神奈川県が北限産地となっています。1958年以来、約30年ぶりの1987年に、私が小田原市風祭にて再発見したときには約60株の生育を確認しましたが、それから8年を経た1996年8月に久しぶりに観察に出かけましたところ、その谷のみで100株ほどに増えておりまして、生育範囲も広がっておりま

した。

その沢の水系を観察して行きましたところ、群生地的一本南側の谷にも11株の小群落がありました。周囲を笹や灌木に覆われて、暗くなりつつありましたので、枝や笹を切り払って光が十分あたるようにしておきました。コハチジョウシダは環境さえ整えば、思ったより繁殖力が旺盛なシダのようです。この産地は第一の群生地と同じ早川水系に属しております。

1996年6月12日に「神奈川県植物誌、改訂版」用の標本採集に出かけた折に、小田原市久野の山王水系で標高約180mのスギ植林の東向き斜面の明るい林床に11株の小群生地を発見しました。

この生育地は第一の群生地から北東に約500mほどしか離れていませんので、ことによつたら南風に乗って第一の産地から孢子が拡散した結果かも知れないと思うのですが、水系が異なりますので、明らかに新産地と言うことができましよう。

新産地は、わずか数100mとはいえ第一の産地から北に位置しますので、エリアとしては同じOD-2ではありますが、小田原市久野産が北限新産地となりました。

## 神奈川県植物誌調査会

### 1996年度総会報告 (事務局)

去る4月21日、平塚市博物館で1996年の総会が開かれました。まず、1995年度の事業報告と決算報告がなされましたが、事務局の準備が当日に間に合わず、会計監査は後日おこない、本誌上で報告されることが承認されました。次に、1996年度の事業計画と予算案が審議され、可決されました。

続いて、小崎氏が標本の作り方について解説し、見分けにくい植物について、城川氏がヤマハンノキとケヤマハンノキ、シラゲヒメジソとヒメジソ、ケイワタバコとイ

ワタバコ、ケハリギリとハリギリについて、北川氏がコアゼガヤツリとその近縁種について、勝山氏がトウゴクヘラオモダカとヘラオモダカ、ニッコウコウガイゼキショウとその近縁種、スゲ属数種について、木場氏がミゾイチゴツナギとその近縁種についてミニレクチャーを行いました。

さらに、植物誌改定のための調査の進め方について勝山氏が概要を説明し、各調査ブロックに分かれて、調査の進め方についての話し合いが行われました。

### ◇1995年度 事業報告

1995.5.13 年度総会(県立博物館)

1995.6.20 フロラカナガワ40号発行

1995.6.25 野外研究会(小田原石垣山)

1995.7.1 運営委員会(植物誌改訂作業のための  
検討会：県立博物館)

1995.9.2 運営委員会(植物誌改訂作業のための  
検討会：平塚市博物館)

1995.10.10 野外研究会(丹沢経ヶ岳)

1996.1.5 フロラカナガワ41号発行

1996.1.27 臨時総会(植物誌改訂へ向けての発  
会式：県立博物館)

・『初山泰一先生卒寿記念論文集』の販売(継続)

・『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』の  
販売(継続)

・丹沢大山自然環境調査(植物相)への協力  
(継続)

・神奈川県立博物館の情報システムへの協力  
(継続)

・長野県植物誌への協力

西山清治，根本 平，長谷川義人，  
浜口哲一，早川亮太，守矢淳一，  
村上司郎・山本 明

作業委員\*\* 各ブロック事務局と執筆予定者  
事務局 勝山輝男・木場英久・田中徳久

\* 運営委員は、予算・決算と事業計画、会  
の運営を審議する。

\*\* 作業委員は、植物誌の改訂の作業をお  
こない、各ブロックの事務局と執筆予  
定者で構成される。執筆予定者は運営  
委員・各ブロック事務局の自薦・他薦  
で選出する。

#### ◇1996年度 事業計画

フロラカナガワの発行

(年3回，4月・8月・12月頃を予定)

『神奈川県植物誌1988』改訂のための検討・調査  
野外研究会

『笏山泰一先生卒寿記念論文集』の販売

(継続)

丹沢大山自然環境調査(植物相)への協力

(継続)

神奈川県立博物館の情報システムへの協力

(継続)

#### ◇1996年度 運営体制

顧問 笏山泰一

代表 城川四郎

運営委員\* 秋山 守，内田藤吉，大場達之，  
大森雄治，小崎昭則，小原 敬，  
笠原基知治，北川淑子，小林純子，  
鈴木 一喜，諏訪哲夫，高橋秀男，

---

## 会計監査報告

(会計監査担当 守矢淳一・長谷川義人)

4月の総会時にできなかった、監査報告をいたします。監査の結果、現金、帳簿等は適正に管理されていました。

---

## 一新刊書紹介一 (事務局)

厚木市博物館資料集No. 8 厚木市荻野の植物II 丹沢植物調査団編、A4版131ページ、厚木市教育委員会発行。

厚木市では市の博物館の展示のための基礎調査として、荻野地区の植物相と植生を調査してきた。その第一報として昨年(1995年)「厚木市荻野の植物I」が出され、517種類の維管束植物が記録された。今回はその続報で、812種類の植物が記録されている。維管束植物のリストの他に、植物の研究史、分布上特色のある植物や稀産種の解説、植物ごよみ、コケ植物とキノコ類のリストがまとめられている。巻頭には6ページにわたって植物のカラー写真が色を添えている。調査は厚木ブロックのまとめ役をしている諏訪哲夫先生など厚木市博物館準備室のメンバーが事務局となり、丹沢植物調査団(団長、高橋秀男)を結成して行っている。入手したい方には有料販売される。値段は4400円。問い合わせは厚木市教育委員会文化財保護係TEL 0462-23-9558へ。

---

## 一訃報一 (城川四郎)

去る、9月7日、交通事故で内田藤吉先生が逝去されました。米寿を目前のご高齢にもかかわらず、なお矍鑠として研究にいそしまれ、後輩の指導に力を注いで惜しまれなかった内田先生を、思いがけぬ事故で突然

失ったのはいかにも残念至極です。先生のご活躍の数々をここには記しませんが、会員のみなさんのすぐ目につくところでも本誌No. 42表紙のアケボノシュスランの写真があり、No. 32のスハマソウとウスギオウレン、No. 29のホソバナアマナの写真などもあります。先生のご冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

---

## 編集後記

シーズン中は忙しく出歩かれていた会員のみなさまも、秋になって、そろそろ標本の整理を始められている頃ではありませんか。毎週第2水曜日に、小田原の県立博物館で県植物誌のための標本の整理・同定作業をおこなっています。もちろん、この日以外でも、あらかじめ学芸員と連絡をとってから、標本をお持ちいただいて結構です。

県立博物館に、標本を提出してくださるときに、わざわざ、時間をかけて分類順に並べ直してからお持ちになる方がいらっしやいますが、むしろ同じ日に同じ場所で採集された標本をひとまとめにさせていただくと、その後の整理の都合上、とても助かります。

前号でも、お伝えしたことですが、標本ラベルのデータはコンピュータのデータベースに登録します。これは各ブロックの事務局で行ないませんが、結構手間のかかる仕事です。ワープロやパソコンに慣れている方は、標本のデータを次のようなフォーマットで入力し、標本と一緒にフロッピーディスクも提出してもらえると助かります。「採集者の標本番号、和名、調査メッシュ、地名、標高、3次メッシュコード、採集地の環境、採集年月日、採集者氏名」

また、FLORA KANAGAWAでは、新産地情報、植物誌改定のための各ブロックの活動状況など、会員のみなさまからの投稿をお待ちしております。